の依に非ざるが故に皆永く棄捨す」等云云。爾前の経々と法花経と之を挍量するに、彼の経々は無数なり、時節既に長し。一仏の二言ならば彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法蔵第十一と仏記に之有り。天親は千部の論師、四依の大士なり。天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず。誰か之を信ぜん。其の上多きを捨て小きに付くとも、法花経の文分明ならば少し恃怙有らん。法花経の文の何れの所にか十界互具・百界千如・一念三千の分明なる証文之有りや。随いて経文を開拓するに「断諸法中悪」等云云。天親菩薩の法花論・堅慧菩薩の法性論にも十界互具之無く、漢土南北の諸大人師・日本七寺の末師の中にも此の義無し。但天台一人の僻見なり。伝教一人の謬伝なり。故に清涼国師の云く、「天台の謬りなり」。慧苑法師の云く、「然れども天台が小乗を呼びて三蔵教と為すは、其の名謬濫するを以て」等云云。了洪の云く、「天台独り未だ花厳の意を尽さず」等云云。得一の云く、「咄きかな智公、汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説の教時を謗ず」等云云。弘法大師の云く、「震旦の人師等、諍いて醍醐を盗みて各自宗に名く」等云云。夫れ一念三千の法門は一代の権実に名目を削り、四依の諸論師其の義を載せず。漢土・日域の人師も之を用いず。如何が之を信ぜん。

答えて曰く、此の難最も甚だし、最も甚だし。但し諸経と法花との相違は経文より事起りて分明なり。未顕と已顕と、証明と舌相と、二乗の成と不と、始成と久成と等、之を顕す。諸論師の事は、天台大師云く、「天親・竜樹内鑑冷然たり。外には時の宜しきに適い各権りに拠る所あり。而るに人師偏に解し、学者苟も執し、遂に矢石を興し、各一辺を保ちて、大に聖道に乖けり」等云云。章安大師云く、

「天竺の大論尚其の類に非ず。真旦の人師何ぞ労わしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず、法相の然らしむるのみ」等云云。天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然たり。然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか。人師に於ては、天台已前は或は珠を含み、或は一向に之を知らず。已後の人師は或は初めに之を破して後に帰伏する人有り。或は一向に用いざる者も之有り。但し「断諸法中悪」の経文を会すべきなり。彼は法花経に爾前の経文を載するなり。往きて之を見よ。経文分明に十界互具之を説く。所謂「欲令衆生、開仏知見」等云云。天台此の経文を承けて云く、「若し衆生に仏の知見無くんば、何ぞ開を論ずる所あらん。当に知るべし、仏の知見の衆生に蘊在することを」云云。章安大師云く、「衆生に若し仏の知見無くんば、何ぞ開悟する所あらん。若し貧女に蔵無くんば、何ぞ示す所あらん」等云云。但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり。此の事を仏遮会して云く、「已今当説、最為難信難解」と。次下の六難九易是なり。天台大師云く、「二門悉く昔と反すれば、信じ難く、解し難し。鋒に当るの難事なり」。章安大師云く、「仏此を将て大事と為す。何ぞ解し易きことを得べけんや」。伝教大師云く、「此の法花経は最も為れ難信難解なり。随自意の故に」等云云。夫れ仏より滅後一千八百余年に至るまで、三国に経歴して但三人のみ有りて、始めて此の正法を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教、此の三人は内典の聖人なり。

問うて曰く、竜樹・天親等は如何。答えて曰く、此等の聖人は知りて而も之を言わざりし仁なり。或は迹門の一分之を宣べて本門と観心とを云わず。或は機有りて時無きか。或は機・時共に之無きか。天台